

ムーンメモリア・ロストノイズ  
十四話…賢者は引き際を知る

雨和七瀬

樹上から飛び降りてくるアオガネトカゲの爪を、ルークは咄嗟に発動した防御魔法でいなす。そのまま弾かれて地面に落ちることを期待していたが、ブランカと同じくらいの体格を持つアオガネトカゲは魔力で編まれた障壁にしがみつき、壁の向こうにいる獲物を睨みつける。

「ここで貫く……!!」

ブランカは魔法の壁の中からアオガネトカゲの顎の下を突き刺そうとする。しかしガキン、と鈍い金属音が鳴り、まったく歯が立っていないかった。逆に、その一撃を皮切りに、魔力の壁が少しずつ崩れながら消え始める。

「そろそろ限界だ、下がれ」

ルークの冷静な言葉に、ユノとブランカはすぐさま敵との距離を取る。完全に防御魔法が切れた瞬間、アオガネトカゲは落ちていくのに身を任せ、大きく口を開けて飛び込んできた。ルークは腕を引いて体の向きを変えながら後ずさり、間一髪で避けた。そのままアオガネトカゲはガシヤン、と鎧が落ちるような音を立てて地面に叩きつけられた。

「喰らえ！」

その隙にユノはアオガネトカゲの弱点である目に向けて発砲した。弾道は確実に眼球を貫くことができていたが、アオガネトカゲは固い鱗で覆われた前足で目を覆い、弾丸を弾いた。ユノは舌を鳴らしつつも、追撃の糸口をそこに見た。

「ブランカ、アイツが手を降ろした隙に目を突け！」

ブランカは頷くと武器の切先を下に向け、その機を窺う。しかしアオガネトカゲはもう片方の目でギロリとユノに視線を向けると、勢いよく振り向いてその硬い尾で周囲を薙ぎ払う。その尾の先がブランカの足を払い、ブランカはその勢いに負けて体勢を崩した。

「ブランカ！」

ユノはブランカに声を掛けるが、目の前には自分を凝視する魔物、そして手に持っているのは再装填が必要な得物。

ユノはルークに目配せする。ルークもそれに気づき、小さく頷く。アオガネトカゲが前足を上げて立ち上がったと同時に、ユノとの間にルークが割って入る。振り下ろされた爪を、両手で支えた剣で受け止める。その隙にユノはブランカの元へ駆け寄り、ブランカの手を取って立ち上がらせた。

「行けるか？」

「はい！」

ブランカは脛を打たれた痛みでじわりと涙を浮かべていたが、手はしっかりと武器を握っていた。

ルークは爪による攻撃を押しつけ、空いた左手を突き出す。

「ゲランゲン！」

ルークの詠唱に応じ、アオガネトカゲの足元の地面が勢いよく隆起し、その身を貫かんとする。前足が地に着く前に訪れた危機にアオガネトカゲはその視線を下に向けるほかには為す術がない。しかし為す術がないことは生まれる前から分かっている。大地の槍はアオガネトカゲの体表の中でも珍しく鎧で覆われていない腹に当たるも、その皮は肉を裂くことを許さなかった。跳ねあがった地面に弾き飛ばされ、アオガネトカゲは体勢を崩して仰向けに倒れた。

「そこも硬いのかよ！」

ユノは弾を込め直しながら、ブランカをけしかけける。

「まあいいや、ブランカ！ 刺せそうなところ刺せ！」

ブランカは好機を逃さないように腹を見せるアオガネトカゲに駆け寄り、喉に向けて刃を向けると同時に、その姿を見やる。狙っている喉は腹と同じ色をしているが、後ろ脚のあたりから鱗で覆われた尾にかけての皮膚の色が変わっていることに気付いた。

「まずはこっち！」

ブランカは先程の恨みもあって、刃の向きを変えて尾の付け根を刺すと、今までの攻撃の効かなさがまるで嘘かのように深く貫くことに成功した。ブランカはその勢いのまま刃を通し、アオガネトカゲの鈍器のような尾を切り落とした。

「次は、とどめの喉——ッ！」

ブランカはもう一度武器を振りかざすと、真つすぐ喉に向けて振り下ろした。しかしアオガネトカゲは先程までの重々しい動きからは想像もできない軽い動きで体の天地を返しながら避けた。そして尾を切ったブランカの方をちらりと見ると、手足を素早く動かして逃げ出した。

「あつ、ちよ、待てエーッ」

ブランカはすぐさま武器を片手に急いで追いかけたが、アオガネトカゲは木にそそくさと登り始め、姿をくらまそうとしていた。ブランカは咄嗟に武器を大きく振りかぶって投げるも、アオガネトカゲの速さに追いつかず、武器は木の幹にガイン、と音を立てて突き刺さった。その頃にはもう、アオガネトカゲを完全に見失ってしまった。

「尻尾が切れるだけであんなに速くなるんだな……」

その速度感溢れるアオガネトカゲの姿に、ユノもただ感想を述べる事しかできなかった。

ルークは静かにアオガネトカゲの置き土産である尻尾に近づく。地面の上で転がしながら表面を確認すると、数枚、傷の無い大きな鱗を見つけた。

「尻尾から鱗が取れそうだ。無理に追いかけて、尾から鱗を剥いでミナートに戻るのが賢明だろう」

ルークがそう言いながら短剣を取り出し、鱗の間に刃を通した。そのまま剥がしてみると、生き物の鱗でありながら、いっそう鎧の破片のように見える。

「ブランカ、その辺に水辺があるだろう。鱗に付いている汚れを落としてくれ」

ルークが鱗を剥ぐ様子を眺めていたブランカに一枚目の鱗を渡すと、ブランカは「……はい」と言いながら鱗を受け取って水辺を探しに行ったが、どこか上の空であった。ルークはそのぼんやりとした背を見送っていたが、視線を戻して作業を続けようとした。しかし後ろからユノに話しかけられる。

「オレがブランカについてやってやるよ」

ルークが見なくても分かる。ユノは笑いかけていた。

「……好きにしろ」

ルークは振り返らずに呟くようにして答えると、ユノの「へいへい」という気の抜けた返事はすぐに遠ざかっていった。

最後の一枚を取り終えると同時に、何往復もしていたブランカとユノが戻ってきた。ブランカは泥の落ちた鱗

をルークに手渡すと、また鱗を受け取るべく手を差し出した。

「短剣のついでに俺が行ってくる。二人で待っている」

「……わかりました」

やはり上の空、いや、何か考え事をしているように見えた。ブランカをユノに任せて、ルークはその場を後にした。

清泉の森の名に恥じぬ澄み切った泉に辿り着くとルークはしゃがみ、手袋を外して鱗を水にくぐらせる。軽く撫でると、鱗本来の鮮やかな青が姿を見せた。それを取り出すと、鱗と水膜がまるで磨き上げられた鏡のように彼の顔の輪郭を映した。ルークは短剣の汚れも落として鞘に納めて、改めて眼前に広がる光景を眺めた。木漏れ日を反射する、透き通った泉。セヌイで見た地底湖とはまた違った輝きを放っていた。

立ち上がるうとした瞬間、カツ、と何か小さいものがルークの頭につかつた。ルークはすぐさま立ち上がって上を見ると、縦長の瞳孔を持った瞳と目が合った。

(さっきのアオガネトカゲ……!)

ルークはすぐさま剣を抜き、臨戦態勢を整えたが、樹上でルークを観察していたアオガネトカゲは目をギョロギョロトせわしなく動かしだかと思えば、口元に付いていた小石を舂め落とすと、また木々をするすると伝ってどこかへと去っていった。

ルークは剣を収めると、アオガネトカゲが地面に落と  
していった小石を拾った。この辺りでは見るここの無い、  
灰色の石片に、ルークは見覚えがあった。

「固化泥土……！」

ルークはすぐさま小石を捨てると、二人の元へ駆けだ  
した。

ルークが息を切らしながら戻ってくると、ユノとブラ  
ンカは木に腰かけて悠長に携帯食料を食んでいた。

「おかえりなさい……って、どうしたんですか？」

ブランカはクツキーを頬張りながらもルークのただな  
らぬ様子を見て武器を手を取った。ユノも手に付いた欠  
片を払い、真剣な表情を見せた。

「泉の前で木の上に居る『奴』を見かけた。すぐに逃げ  
て行ったが、固化泥土を食べたような形跡があった」

「アイツ、雑食なのは知ってたけど石も食うのかよ！」

ユノは想定外のことに関心した。一方で、ブランカ  
は異様に落ち着き払っていた。

「固化泥土……私たちが出会った場所にあった灰色の石  
ですよ。じゃあやつぱり……」

ブランカは武器を抱えながら、思案を巡らせた。ルー  
クはブランカが言葉を続けるのを少し待ってみたもの、  
陽が傾き始めていることに気付いた。

『異物』の調査もしたいが、一旦退こう。このままだと  
夜までにミナートへ戻れなくなる」

しかし二人はすぐには領かなかった。

「……固化泥土食った魔物を放っておくのか？」

ユノは火薬が詰まったままの銃を抱える。ブランカも  
武器を握りしめていた。

「今から手がかりもなしに探すのは危険だ」

ブランカは話を聞いていながら、手に持った武器をあ  
ちこちに向けていた。そして何かを確信したかのように  
頷いた。

「手がかり……あるかも知れません」

ブランカはルークに一步歩み寄り、武器を突き出した。  
その細く長い得物は、出会った日に見たように、木陰の  
中でもぼんやりと光を放っていた。

〈十五話へ続く〉